



あめとゆきのものがたり

—六月の花嫁—

終らみ子

カーン、カーン。

今しがた通り過ぎた教会から高らかに鐘の音が響いて、俺は思わず足を止めると振り返った。こじんまりとした教会の扉は大きく開かれ、入り口を取り囲むように集まった人々は皆嬉しそうな笑顔を浮かべて、真ん中をゆっくりと歩く二人を祝福している。もちろん、その二人も飛び切りの笑顔だ。

「結婚式かあー」

ぽつりと呟いて、白いドレスに身を包み、幸せそうな新婦さんに目を向けた。

美人、というタイプじゃない。小柄で、どっちかって一と可愛い……愛らしい顔をした花嫁さんだ。そこにいるだけで空気が和んでしまいそうな可愛らしさ。決して派手じゃないけどほんわか和み系。

ちなみに男の方は全くの平々凡々で、何処も特筆すべき点は見つからない。むしろ、平々凡々過ぎるのが特徴かというぐらい、平凡マッシュグラ。どっからどう見たってあんな可愛い子とはつり合わない。一体どうやって捕まえたのやら。

しかも、今は六月。花嫁さんはジューン・ブライドというわけだ。

「……上手くやりやがって」

「何をぶつぶつ言っているんだ」

後ろから、聞き慣れた声がかかる。その呆れた声のトーンからして、彼女はいつもの冷めた瞳で俺を見ているのだろう事がすぐに分かる。

案の定。

振り返ると、思った通りの冷めた深いグリーンの瞳が俺の視線を射抜く。左目が綺麗なハニーブロンドに隠されてかすかにしか見えないのもいつも通りで、俺はこれまたいつも通りフォレストグリーンの瞳を対で見られないのが残念だと思う。

スノウはそのナイスボディを包む地味な灰色の修道服をふわりと揺らすと、俺が今まで見ていたものを確認してため息をついた。

「お前好みか？ あの花嫁は」

「うーん、まあ、どっちかと言われたら……」

「一応聞いておくが。花嫁って意味は分かるな？」

俺に皆まで言わず、強い口調で被せると指をつきつけぐさりと一言。

「結婚したって事だ。つまり、人妻だって事だ」

「あのなー、そんな事言われなくても」

「分かってる、か？ じゃあ、人妻は普通口説こうと考えない、という事も知っているな」

「あー、うん。なるべく、口説かない方向なのは、多分知ってる」

「そうか。それなら安心だ」

まるでお手本のような棒読みだ。踵を返し、再び歩き出した彼女の後を慌てて追う。

「まあね、確かに可愛い娘だったけどね。でもさー、俺が一番大好きなのはスノウだから」

「ああ、はいはい」

隣に並んで彼女の方を向いて言ったのに、スノウはこっちをちらりとすら見てくれない上、さっきの棒読みに輪を掛けた飛び切りの棒読み。しかも、即答というオマケつきだ。

相変わらず、手強い。もう、がちがちに手強い。

だけど、それぐらいで折れるような俺じゃない。ってか、この程度で折れていたらすでにぼっさり逝っている。

「あのな、俺は本気だぞ？ 本気で一目惚れしちゃったのよ、聖痕の聖女サマに」

「お前の本気ほど信じられんものも無いと思うが」

「うっわぁ、悲しいー！ 悲しすぎて俺様泣いちゃう！」

彼女に会ってから、何度このやり取りで泣いただろう。モチロン、心の中で。

「何なら、今すぐ結婚式挙げたってむしろ構わないんだけど！ うん、それいい考え！」

「……馬鹿かお前は」

心底呆れた声で言うため息をつく。いや、いい考えなのは認めるけど流石にイキナリ過ぎるよな、うん。

それに――俺は。

ふと思い出しかけた目的を無理やり押し込めると、いつもの馬鹿面にへらっとした笑みを貼り付けて、アホな提案をする。そう、俺はこうでなくちゃ。

「それじゃあさ、今度、ドレスを贈るよ。飛びっきりの、雪のように真っ白なヤツ。着るぐらい、ダメ？」

「……誰が着るんだ、誰が」

「もちろん、スノウに決まってるじゃんよー。俺が着るわけ無いでしょうよ。大丈夫、サイズはばっちりだからッ」

俺は、ドレスを着た美女は大好きだが、ドレスそのものが好きなわけじゃないしそもそもそういう趣味は持っていない。いや、ソコはふつー着ないでしょうよ。

「今度、俺の誕生日にでも着て見せてよ。せめてものプレゼントとしてさ。一目拝むだけでいーから。ね、眼福眼福！」

「……そんなもの貰ったって、私も着ない」

おや。

ぼそっと言ったスノウの表情は、俺が想像していたものとは多少違っていた。もっとアカラサマに怒ると思ったのに、覇気が無い。

「……どしたの？ 流石に呆れつくしちゃった？」

「……」

「シスターだからって、神サマに一生を捧げる覚悟してるとか、そういうわけじゃないでしょーよ」

その言葉にスノウはぴくりと反応すると、足を止めた。心成しか、前髪の奥の左目が暗い光を放っているように見える。

「神なんて、いるものか」

ぼつりと、だがはっきりとした拒絶。

「私がこんな格好をしてシスターのマネゴトなんかしている意味は、お前だって知っているだろう。私の存在価値は」

「お前に宿る、聖痕にしか無い、なんて言うなよ」

彼女の隠された左目には聖痕が刻まれている。正確には、聖痕の持つ力を発動させる魔法陣が刻まれていると言った方が正しい。聖痕を持って生まれてしまったが為に、スノウは幼くして教会に引き取られ、その力を使いこなす事だけに人生を捧げてきたと言っても過言ではないのだ。

彼女が望んだわけじゃないのに。

いつの間にか、スノウはその人生に雁字搦めにされている。聖痕の為に、生きようとしているようにしか、見えない。

ホント、神サマってヤツは気紛れで――最ッ高に残酷だ。

俺達が出会った理由だって。

どうしようもないぐらい、悪趣味だってのに。

……いや。

本当に、悪趣味なのは。

カーン、カーンと遠くなった教会から、鐘の音が聞こえる。

「聖痕の聖女サマって言ったってさあ。結局は人間なわけだし、自分の思うまま生きてみたって良いんじゃないの？」

時にはハメ外して遊んだりさあ。

気分転換にでも、少しは着飾ってみたりさあ。

それぐらい楽しんで、一体誰が咎めるよ。

俺の台詞に、スノウは僅かに目を見開き。

「本当に――馬鹿だな、レイン」

彼女の名前とは相容れる事の無い俺の名前を口にすると、柔らかかに瞳を細めて笑った。

――その時は、その言葉の本当の意味を知らなかったのだけど。

知らなかったから。

俺も、にへらっとした笑みを浮かべて「馬鹿だよ」と答えた。

馬鹿だからさ。

やっぱ、一度でいいから。

「スノウのドレス姿、拝ませて」

あめとゆきのものがたりー六月の花嫁ー

<http://p.booklog.jp/book/53259>

著者：柊らみ子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/ram-h/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/53259>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/53259>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ